

「十字架への道」

挽地茂男

(マルコ 10 : 32 - 45)

2018.9.9 日本基督教団千歳丘教会

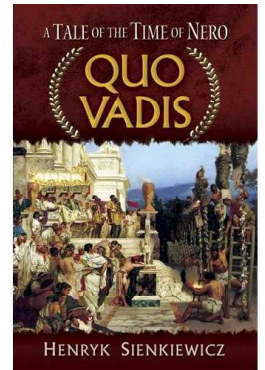
この箇所は今年の5月に2回に分けてお話をしました。わたしたちは、主イエスの受難予告を中心に、その受難の道行きを、行きつ戻りつ、いろいろな角度から学んでまいりました。今日は5月にお話をしました2回を1回に纏めて、大事なポイントを、もう一度、押さえておきたいと思います。5月にお話しました際に『クォ ヴァディス』という有名な小説を取り上げましたが、今日もその『クォ ヴァディス』からお話をはじめたいと思います。

『クォ ヴァディス』の作者は、ヘンリク・アダム・アレクサンデル・ピウス・シェンキエヴィチ (Henryk Adam Aleksander Pius Sienkiewicz, 1846年5月5日 - 1916年11月15日)。1905年に**ノーベル文学賞**を受賞したポーランドの作家です。この小説に出てくる有名な台詞が「クォ・ヴ



シェンキエヴィチ

ァディス、ドミネ」(「主よ、どこに行かれるのですか」)。この「クォ・ヴァディス」という言葉が、本の題名にもなっているのですが、実際は、ヨハネによる福音書 13章 36節の引用です。西暦紀元60年代のローマ皇帝ネロの迫害を逃れて、ローマを後にアッピア街道を下って行くペトロ。それと反対方向にアッピア街道をローマへと上っていく人影。ペトロはそれが主イエスであることに気づきます。そのとき主に向かってペトロが“Quo Vadis, Domine.” (主よ、いずこへ。岩波版下巻295頁)と呼びかけます。シェンキエヴィチは、ヨハネ 13章 36節の言葉をペトロの口に乗せます。「クォ ヴァディス、ドミネ」(「主よ、いずこへ／主よ、どこに行かれるのですか」)。それに応えてキリストは、「なんぢ我が民を棄つる時ローマに往きて再び十字架に懸けられん」(そなたが私の民を見捨てるなら、私はローマに行って今一度十字架にかかるであろう)と答えます。そしてこの言葉がペトロの



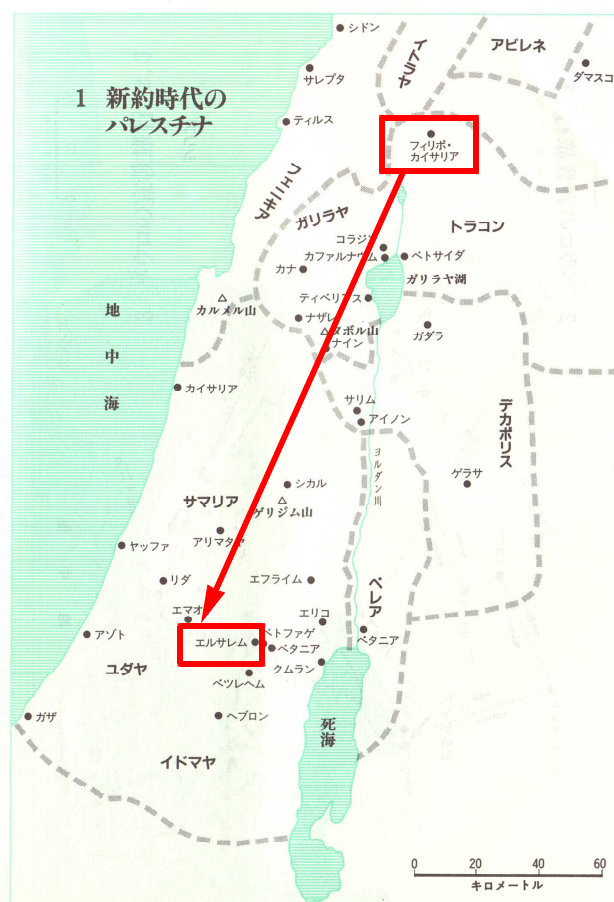
運命を決めることになるのです。ペトロはしばらく気を失っていましたが、起き上がると迷うことなく元来た道を引き返し、そしてローマで捕らえられ、十字架にかけられて殉教した、とこの小説はペトロの最後を伝えます。

「クオ・ヴァディス、ドミネ」を――主よいずこへ行かれるのですかと――問うことは、キリスト者の歩み方の基本です。マルコによる福音書は、8章の27節以降、エルサレムでの受難に向かう主イエスの足取りを描きます。本日の聖書の箇所もそうです。主イエス

はエルサレムに上っていく時に3回にわたってご自分の受難を予告されますが、そのうちの第3回目の予告が本日の聖書の箇所です〔1回目はあのフィリポ・カイサリアでのペトロの信仰告白の直後、2回目は山上の変容とその後の汚れた霊に取りつかれた少年の癒しの後でした〕。今日の3回目の受難予告、32－34節。

10:32 一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。10:33 「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。10:34 異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

主イエスの一行は、エルサレムに向かって行きます。エルサレムはダビデによって全イスラエルの首都と定められ「ダビデの都」とも呼ばれた都市です。その息子ソ



ロモンの時代紀元前967年に神殿が建設され、宗教的・政治的に中央集権国家の中心としての役割を果たします。その後バビロン捕囚の時代紀元前586年、首都エルサレムは神殿と共に陥落します。バビロン捕囚後ユダヤの人々が解放されると、紀元前515年にゼルバベルの指揮の下にほぼ同じ場所に再建されます。その神殿をソロモンの第一神殿に次ぐ第二神殿と呼びます。この第二神殿を、ヘロデ大王が紀元前20年頃に徹底改修いたします。この神殿はその美しさで人々に知られ、当時の文献によりますと、エルサレムは地中海世界有数の神殿都市となっています。主イエスの活動された時に建っていた神殿がこの神殿であります。

しかしこの花の都エルサレムは多くの殉教者の歴史を刻んだ都で



もあったのです。中央集権的な国家体制の首都は、国を豊かにもすれば、その権力と豊かさが王朝や国家を腐敗に導くこともあったのです。主なる神を忘れた(棄てた)国家の指導者たちに、預言者たちは決然と批判の声を上げました。そのために多くの預言者がこの都の滅亡をも預言したのでした。新



約聖書にもそのような歴史の反映が見られます。

(a) マタイによる福音書23章37-38節(ルカ13:34はマタイ23:37と同文)

マタ 23:37 「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。23:38 見よ、お前たちの家は

見捨てられて荒れ果てる…。」

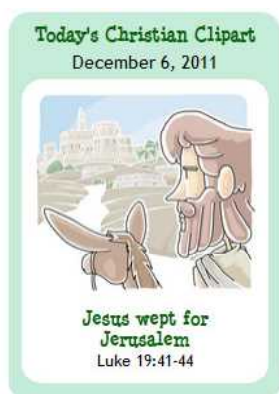
主イエスは自分がこの都で最期を遂げることを強く意識しておられたようで、今のマタイの言葉とあわせて、エルサレムを遠く望みながら次のように語られています。

(b)ルカによる福音書 13章 33－34節〔後半は先ほどのマタイの言葉と同じです。〕

ルカ 13:33 だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。13:34 「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。

しかし主イエスはこのエルサレムを愛しておられました。預言者を殺し、神の言をないがしろにし、神を忘れたこの都の滅亡を涙ながらに預言します。

(c) ルカによる福音書 19章 41



－ 4 4 節

ルカ19:41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、19:42 言われた。

「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。19:43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、19:44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

かくして紀元70年この都エルサレムは、ローマ軍によって再び陥落させられてしまうのです。それを預言した主イエスの言葉は、一般的に「小黙示録」〔マルコ福音書では13章〕と呼ばれる、主イエスの終末預言の中で語られています。ルカ版でお読みします。

(d)ルカによる福音書 21章 20－24節

21:20 「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。 21:21 そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々

は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。 21:22 書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。 21:23 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。 21:24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

主イエスは、預言者を殺し、やがての神の審判がくだる都エルサレムへと今上っていきます。エルサレムの運命は、かつての預言者の時代のエルサレムの運命と二重写し（ダブル・イメージ）になります。主イエスの言と行動も、かつての預言者の言と行動と二重写し（ダブル・イメージ）になっています。エルサレムが預言者（神

の僕）を拒否し、その神の言と神の僕を拒否することによって、エルサレムに滅亡が訪れたように、エルサレムは今また、神の言と神の僕を拒否することによって滅亡を迎えようとしているのです。

エルサレムの宗教指導者とローマ当局は主イエスを亡き者にします。十字架は彼らの宗教と政治の合作です。歴史には不条理が満ちているように、主イエスの死も不条理そのもののように見えます。しかし不条理しか見ないのであれば、わたしたちは、刺繍の裏側だけを見ているに過ぎないのです。刺繍の裏側は訳の分からない糸の交差ししか見えないようでも、その表にはちゃんとした美しい模様が作られていくのです。主イエスの受難予告が、当時の為政者たちによる不正の結果としての不条理な死を予告すると同時に、復活までもその射程に含んでいるのは、不条理を超えるものが貫かれているためなのです。無駄死にに見えるのその死は無駄死にではないのです。敗北に見えるその十字架は、敗北ではないのです。神の救いの実現なのです。

わたしたちは受難予告を読みつ



ユダヤ戦争 [David Roberts, "Siege and Destruction of Jerusalem," 1850]

つ、マルコ福音書の受難予告にははっきりとした特徴があることも学びました。それは受難予告が語られると、そのすぐ後に、マルコ研究で「弟子たちの無理解」と呼ばれる弟子の醜態が描かれます。そしてその弟子たちの醜態を糸口にして、真の弟子のあり方についての教えが主イエスの言葉として語られます。その時、受難のキリストの生き方が、弟子としての生き方（すべての人に仕える僕）を導く典型となっています。

今日の第3回受難予告は、このように始まっていました。32節。
 10:32 一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。受難(予告)に対する弟子たちの恐れが表面化しています〔第2予告を語られた後の弟子たちの反応もそうです。9:32 弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖

くて尋ねられなかった〕。弟子たちは死は恐ろしいもの——わたしたちにとってもそう——なのです。終わり(死)を直視することは、易々とはできないのです。しかし終わりを直視しない者の今の生き方が、弟子たちの無理解（醜態）として表面化します。自分の人生が終わることを認められない者には、自分の死を生き方



の中に収めることのできない者には、現在がことがらが最大の関心事になります。死んでる場合じゃないのです。現世の利益や価値に執着し、地上に残るものが大切になるのです。主イエスは、第1回受難予告の際に、受難を否定するペトロの中にその態度を見いだし、強く叱責されたのでした。8章33節。

8:33 イエスは振り返って、弟子

マルコ福音書における受難予告＝受難予告＋弟子の無理解＋弟子たることについての教え

	受難予告	弟子の無理解	弟子たることについての教え
I	8:31-32	8:33（引き下がれ、サタン）	8:34-9:1（十字架を負って従え）
II	9:30-32	9:34（一番偉いのは誰か）	9:33-37（すべての人に仕える者になれ）
III	10:32-34	10:35（一人を右に一人を左に）	10:42-45（すべての人の僕となれ）

たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

その後「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(8:34)と続くのです。パウロは〔人生が終わること、世界が終わること〕終わりを認めない(知らない)者が、最終的には、「自分の腹(欲望・願望)」を「神」とすると語ります。フィリピ3章19節。3:19 彼らの行き着くところは滅びで

す。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。

今日の第3の受難予告に続く弟子たちの醜態は、次のように描かれています。35-37節。

10:35 ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。

「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」10:36 イエスが、



I 8:31-32	II 9:30-32	III 10:33-34
8:30 するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。 8:31 それからイエスは、 人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、 と弟子たちに教え始められた。8:32a しかも、そのことをはっきりとお話しになった。	9:30 一行はそこを去って、ガリラヤを通って行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まなかった。 9:31 それは弟子たちに、 「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」 と言っておられたからである。 9:32 弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった (ἐφοβοῦντο αὐτὸν ἐπερωτῆσαι)。	10:32 一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。 (καὶ ἐθαμβοῦντο, οἱ δὲ ἀκολουθοῦντες ἐφοβοῦντο.) イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。 10:33「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。 10:34 異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」



What do you
want me to do
for you? Mark 10:35

「何をして
ほ しい の
か」と言わ
れると、1

0:37 二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」

彼らの献身がいかにほどのものかがよく分かります。彼らは打算から自由ではないのです。彼らは主イエスのエルサレム行きを何か「てっぺんを獲る」ような成功を獲得する行為と見ているのです。そして主イエスを勝ち馬と見込んだ彼らが求めているのは、主イエスの弟子としての特権的地位を確保することなのです。受難に向かうイエスの意志とは実に対照的、矛盾した態度とさえ言えるでしょう。

これが神の僕としてエルサレムに向かっていく主イエスの弟子の姿と言えるでしょうか。3回にも及ぶ受難予告は、エルサレムに向かう道が弟子



サンティアゴへの巡礼路

たちにとって孤独な道であること

を、際立たせるのです。

ひょっとするとあの「**山上の変容**」**出来事の栄光**の記憶が彼らの中に残っていて、そのように考えることを促したのかもしれませんが。あの変容の山上にペトロと共に主に同行した



山上の変容

のは、このゼベダイの息子のヤコブとヨハネだったのですから、無理もないかもしれません。しかし主イエスは「自分が殺される」とまで言っておられるのですから、やっぱりずれています。人は自分の聞きたいことしか聞かないものなのです。彼らは、主イエスのエルサレム行きが成功裏に終わると想定して、その暁には、しかるべき地位を約束してもらいたい、と願っているのです。イエスの弟子としての特権的地位を確保し、自分たちの栄達を確かなものにするために、主イエスの言質をおさえておきたかったのです。要するに、彼らは——他の弟子たちを出し抜いて——偉くなりたい(出世をしたい)と思ったのです。そ

れに対して主イエスは「このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが



受ける洗礼を受けることができるか」(v.

38)と問います。

「杯」〔マコ14:36この杯をわたしから取りのけてください〕と

「洗礼」〔ロマ6:3-4, コロ2:12

洗礼によって、キリストと共に葬

られ、ルカ 12:50 しかし、わたし

には受けねばならない洗礼があ

る。それが終わるまで、わたしは

どんなに苦しむことだろう〕は、

苦しみと死を象徴する言葉です。

ゼベダイの息子たちは、主イエス

がこの言葉によって、自分たちに向

かって、エルサレムで成功を収

めるために苦しみを耐え、犠牲を

払う覚悟があるかを確かめておら

れると理解します。彼らは答えます。

「できます」(v.39)。しかしそ

れは、簡単に「できます」と言え

るようなことではないのです。こ

の場面は、十字架直前の主イエス

に対する、ペトロの態度とよく似

ています。マルコ 14 章 29 – 3

1 節。マル14:29 するとペトロが、

「たとえ、みんながつまずいても、

わたしはつまずきません」と言っ

た。14:30 イエスは言われた。「は

っきり言うておくが、あなたは、

今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、

三度わたしのことを知らないと言

うだろう。」14:31 ペトロは力を

込めて言い張った。「たとえ、御

一緒に死なねばならなくなっ

ても、あなたのことを知らないな

どとは決して申しません。」皆の者

も同じように言った。

覚悟とは裏腹

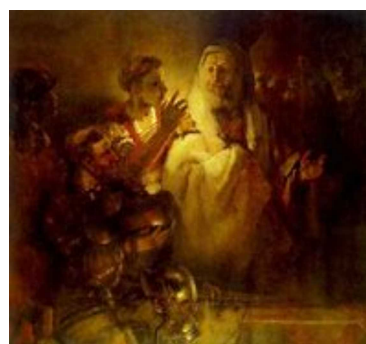
に、苦難の最

中に主イエス

を棄てて、ペ

トロと弟子た

ちは、全員逃



レンブラント「イエスを否認にするペトロ」

げてしまうのです。主イエスはゼ

ベダイの息子たちにこう語ります。

「確かに、あなたがたはわたし

しが飲む杯を飲み、わたしが受け

る洗礼を受けることになる」(v.3

9)。主イエスを棄てて逃げてしま

った弟子たちも、やがて、主イエ

スのように、自分の十字架を負い、

苦難と死をもろともせず福音を伝

えるものになっていきますが、そ

れはペンテコステ以後、聖霊の助

けによって可能となるのです。彼

らは「できます」と言ってもでき

ないのです。今の彼らの頭にある

のは、やがて手につかむ栄光のことなのです。彼らには、まだ終わりが自覚されていないのです。主イエスの「栄光」が十字架のことだとは、微塵も思い当たることがないのです。

それは他の10人の弟子たちも同じでした。41節。

10:41 ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。



ゼベダイの息子たちの裏工作を知った十人の弟子たちが腹を立てます。この「腹を立てる」と訳されている言葉(*ἀγανακτεῖν*)は、珍しい言葉で、強い怒りを表すのに使われます〔マコ・マタイ3回、ルカ1回〕。マルコでは14章のナルドの香油を主イエスの頭に注いだ女性を、弟子たちが厳しくとがめる言葉として出てきます(14:4)。さてこの弟子たちの立腹は何を語っているのでしょうか。残りの十人の弟子たちは、「出し抜かれた」と思ったのです。その思いが強い怒りとなって表面化したので

した。この怒りは、弟子たちの世俗主義を暴露しているのです。弟子たちの立腹は、彼らも同じものを欲していることを認めた証拠なのです。学歴であれ、社会的地位であれ、世俗的な栄達を追求する者にとっては、主イエスの死はまったく無意味な出来事となるのです。



しかしこれが弟子なのです。

主イエスを誤解していても、無理解であっても、身勝手ではあっても、それでも彼らは主イエスに付き従ってきているのです。ある注解者はこう言っています。「弟子たちはイエスの言葉と事態の成り行きに完全に当惑してしまった。しかしそれでも彼らは従った。彼らにとっては一つのこと……イエスを愛していること……を除いてすべてがまるで闇の中で見えないことのようにだった」(バークレー『マルコ福音書』304頁)。主イエス・キリストは弟子たちの無理解や弱さにもかかわらず、弟子たちの主であることを、おやめにはならないのです。主イエスは彼らの

献身がたとえ打算的であっても、尊いものとなさるのです。彼らの弱さを知りつつ、そこから始まる何かをご存じなのです。

これまでの受難予告と同じように、弟子たちの醜態をきっかけに、主イエスによって、真の弟子のあり方が語られます。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている」(v. 42)。「異邦人の間」の実態と「あなた方の間」であるべき姿が対比されます。

「あなた方の間」とは「弟子たちの間」であり「教会における」あり方を間接的に指しています。「異邦人の間」では、「支配者と見なされている人々が民を支配し」ています。これが普通のことなのです。「異邦人の間」では、「偉い人たちが権力を振るって」います。



これが普通のことなのです。しかし「あなたがたの間では」そうではないのです(v. 43a)。主イエスはこの普通に見える〔見た目の〕実態を逆転します。もち

ろん第一人者であること、偉くな



ることは否定されていません。主イエスは、真の第一人

者、真の偉大さの中身、その内実を示すのです。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、10:44いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」(43b-44)。この立場と価値の逆転は、第2受難予告の際のエピソード・教えでも同じでした。9章35節。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」。

この「仕える者になる」という精神が、初代教会の精神となりました。パウロはこう語ります。コリント人への手紙一9章19節。一コリ9:19 わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。

第2コリント4章5節。

二コリ4:5 わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝え

ています。わたしたち自身は、イエスのためにあなたがたに仕える僕なのです。

主イエスは、「(人の子は)仕えられるためではなく、仕えるために…来」られたのです。そして主イエスの仕える者として究極の行為が「多くの人の身代金として自分の命を献げる」ことなのです。

「身代金」と訳されている言葉(λύτρον)は、「解放する」(λύω)という動詞から派生した言葉で、「解放の代価」「贖いの代価」「買い戻しの代価」と訳される言葉です。元来は、借金のカタに取られて奴隷となった妻や子供や親族を、また戦争による捕虜を代価を払って買い戻すことを意味しました。「贖い」とは、一つにそのような「買い戻しや」「解放」のことを言います。もう一方で旧約聖書では、「贖い」という言葉は、死と罪(不幸や災い)からの救いと

いう意味を持っています。そして罪を贖うために「贖罪の献げ物」として羊や山羊が献げられました。新約聖書では、主イエスが献げられます。洗礼者ヨハネは主イエスを指してこう言いました。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)。主イエスが贖いの代価となったのは、人間が奴隷だからです。聖書は人間を「罪の奴隷」と考えます(ヨハ8:34, ロマ6:6, 17, 20)。ヨハネ福音書8章34節。「8:34 イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である。」この罪の奴隷からの解放、つまり神の贖いが、イエス・キリストの十字架と復活によって決定的に示されたのです。この贖罪のわざが、神の愛の究極の啓示なのです。

それでもわたしたちはまだ罪を犯します。それはわたしたちが肉体を持って生きているからです。パウロもそのために苦しみました。ローマ書7章15節－8章1節〔中略含む〕「¹⁵わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事





をしているからである。…²²すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、²³わたしの五体には別の法則があって、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、五体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。²⁴わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれがこの死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。²⁵わたしたちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。^{8:1}こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」これは回心前のパウロの言葉ではありません。パウロを特別視するために、余りにも多くの学者が、この言葉を回心前の言葉として読もうとします。そうではありません。回心後のパウロの言葉であることは、最後の方の言葉で分かります。肉体を持って生きると言うこと

は、パウロにとってもそれほど容易なことではなかったのです。しかしその罪は、もうすでに十字架で決着がついているのです。「²⁵わたしたちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。^{8:1}こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」そして主イエスの十字架に示された愛と、パウロの中に働く聖霊は、彼を解放する力となり、彼を世界宣教に導いていったのです。

弟子たちは、主イエスがこの世を去ったのち、自分の十字架を負って主イエスに従う者に変えられていきました。主イエスを失って、むしろ、主イエスの生涯の本質を理解するようになったのです。

“Quo Vadis, Domine.” 主イエスの行かれる道が彼らには、よりは



っきりと見えるようになったのです。あの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」の巡礼の道は、主イエスに兄のヨハネと共に、あなたの右と左にと願ったヤコブがヒスパニア(スペイン)にまで宣教したことの名残なのです。

弟子たちには、死によって成就されるものが存在することが理解できませんでした。人を生かすために死ぬということそのものが、不合理だったのです。死ねば終わりなのです。死ねば、元も子もなくなる。命あつての物種だったのです。しかし聖書は、死を「終わり」としないのです。生き尽くされた死が、新たな生命の出発だと語るのです。聖書は、キリストの墓から始まる新しい生命を語ります。ヨハネ福音書 12 章 24 節は、キリストの生涯とその死を描写する美しい比喻がつかわれます。



はっきり言うておく。
一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人

は、それを保って永遠の命に至る。
12:26 わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

2018.5.6 日本基督教団千歳丘教会

2018.5.13 日本基督教団千歳丘教会

2018.9.9 日本基督教団千歳丘教会



10:32 一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。

10:33 「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。

10:34 異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

10:35 ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」

10:36 イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、

10:37 二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」

10:38 イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受

ける洗礼を受けることができるか。」

10:39 彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。

10:40 しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」

10:41 ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。

10:42 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。

10:43 しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

10:44 いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

10:45 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

10·32 Ἦσαν δὲ ἐν τῇ ὁδῷ ἀναβαίνοντες εἰς Ἱεροσόλυμα, καὶ ἦν προάγων αὐτοὺς ὁ Ἰησοῦς, καὶ ἐθαμβοῦντο, οἱ δὲ ἀκολουθοῦντες ἐφοβοῦντο. καὶ παραλαβὼν πάλιν τοὺς δώδεκα ἤρξατο αὐτοῖς λέγειν τὰ μέλλοντα αὐτῷ συμβαίνειν

10·33 ὅτι Ἰδοὺ ἀναβαίνομεν εἰς Ἱεροσόλυμα, καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδοθήσεται τοῖς ἀρχιερεῦσιν καὶ τοῖς γραμματεῦσιν, καὶ κατακρινούσιν αὐτὸν θανάτῳ καὶ παραδώσουσιν αὐτὸν τοῖς ἔθνεσιν

10·34 καὶ ἐμπαίξουσιν αὐτῷ καὶ ἐμπτύσουσιν αὐτῷ, καὶ μαστιγώσουσιν αὐτὸν καὶ ἀποκτενοῦσιν, καὶ μετὰ τρεῖς ἡμέρας ἀναστήσεται.

10·35 Καὶ προσπορεύονται αὐτῷ Ἰάκωβος καὶ Ἰωάννης οἱ υἱοὶ Ζεβεδαίου λέγοντες αὐτῷ, Διδάσκαλε, θέλομεν ἵνα ὃ ἐὰν αἰτήσωμέν σε ποιήσης ἡμῖν.

10·36 ὁ δὲ εἶπεν αὐτοῖς, Τί θέλετέ (με) ποιήσω ὑμῖν;

10·37 οἱ δὲ εἰαυτῷ, Δὸς ἡμῖν ἵνα εἰς σου ἐκ δεξιῶν καὶ εἰς ἐξ ἀριστερῶν καθίσωμεν ἐν τῇ δόξῃ σου.

10·38 ὁ δὲ Ἰησοῦς εἰαυτοῖς, Οὐκ οἶδατε τί αἰτεῖσθε. δύνασθε πιεῖν τὸ

ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω ἢ τὸ βάπτισμα ὃ ἐγὼ βαπτίζομαι βαπτισθῆναι;

10·39 οἱ δὲ εἰαυτῷ, Δυνάμεθα. ὁ δὲ Ἰησοῦς εἰαυτοῖς, Τὸ ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω πίεσθε καὶ τὸ βάπτισμα ὃ ἐγὼ βαπτίζομαι βαπτισθήσεσθε,

10·40 τὸ δὲ καθίσαι ἐκ δεξιῶν μου ἢ ἐξ ἐυνύμων οὐκ ἔστιν ἐμὸν δοῦναι, ἀλλ' οἷς ἠτοίμασται.

10·41 Καὶ ἀκούσαντες οἱ δέκα ἤρξαντο ἀγανακτεῖν περὶ Ἰακώβου καὶ Ἰωάννου.

10·42 καὶ προσκαλεσάμενος αὐτοὺς ὁ Ἰησοῦς λέγει αὐτοῖς, Οἶδατε ὅτι οἱ δοκοῦντες ἄρχειν τῶν ἐθνῶν κατακυριεύουσιν αὐτῶν καὶ οἱ μεγάλοι αὐτῶν κατεξουσιάζουσιν αὐτῶν.

10·43 οὐχ οὕτως δέ ἐστιν ἐν ὑμῖν, ἀλλ' ὅς ἂν θέλῃ μέγας γενέσθαι ἐν ὑμῖν, ἔσται ὑμῶν διάκονος,

10·44 καὶ ὅς ἂν θέλῃ ἐν ὑμῖν εἶναι πρῶτος ἔσται πάντων δοῦλος·

10·45 καὶ γὰρ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου οὐκ ἠδιακονηθῆναι ἀλλὰ διακονῆσαι καὶ δοῦναι τὴν ψυχὴν αὐτοῦ λύτρον ἀντὶ πολλῶν.